第１回　香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会

議事録（要旨）

■開催日時：令和元年８月９日（金）13:30～15:30

■開催場所：香南市役所本庁舎 ３階第４会議室

■出席委員：受田浩之委員長、田内修二副委員長、竹内　淳委員、岡林八重美委員、宮﨑利博委員、中脇正人委員、田中愉之委員、近藤穂乃佳委員、小松さやか委員、百田年真委員、水田貴士委員、國松美紀委員、土居秀臣委員

■事 務 局：野島農林課長、岡林商工水産課長、前川こども課長、岩田地域支援課長、西内企画財政課長、浜田企画財政課長補佐、田渕、嶋内

【次第】

１．開会

２．市長あいさつ（代理　副市長）

３．委員長あいさつ

４．委員委嘱および自己紹介

５．議事

（１）総合戦略の取り組み状況

（２）平成 30 年度の目標達成状況（進捗状況シート）

■委員長　香南市の人口ビジョンを 2015 年（平成 27 年）に策定した。2060 年に向かって、（その当時から 45 年経つと）香南市の人口はどのように減少していくかを、国立社会保障人口問題研究所が計算している。その数字を基に、香南市としてその人口減少を見過ごすことはなく、もっと増えるように、あるいは下げ止めるように、目標値を設定したところである。人口が減らないようにするにはどうしたら良いのかを、「総合戦略」として策定し、細かい計画を立案している。また、総合戦略は人口ビジョンを実現させるための具体的な戦略であって、４つの項目に基づいている。

総合戦略の基本目標１については、『香南市産業振興計画』がそのものとして繋がっている。

基本目標２～４については、『香南市人生支援計画』が支えている。これらを合体させた香南市総合戦略の平成 30 年度の実施状況と令和元年度の取り組みに関する評価をいただきたい。結果は人口ビジョンに繋がっていくという大きな目標を持っているということを理解していただき、そのためにそれぞれの目標あるいは各施策がどういう風に動いているか、どういう成果を出し始めているか、をご覧いただきたい。

■委員　新規就農者が増えているが、目標値には達していない。大きな原因が、農業を始めるにあたって大変な資金が必要。香南市の場合は施設園芸が中心となっており、施設

を１棟建てるのに、個人で始めるとすると１千万を目途にしなければならない。補助金があっても、新規就農の人数が増えないのは、資金が必要なため、やろうと思ってもできないのではないか。

香南市では非常に手厚い補助があり、施設園芸については新規就農者人数も増えてきている。

４月に開設した「とさのさと」にも香南市の生産者が商品を出している。メロンを例に例えると、糖度が足りない・少し劣化したなどの理由で、エメラルドメロンと呼ばれないものが「とさのさと」に出ており、夜須で買えば2,000円、「とさのさと」で買えば1,000円で、味は変わらないが日持ちがしないをいうところを付け加えておくと、1,000円のメロンが飛ぶように売れたと聞いている。しかし、そのようなメロンを作っていたら、実際、農家の所得は上がらない。助ける形で行っているのが道の駅であり、それを農業所得の向上と捉えると語弊がある。専業でやっている方の農業生産額を市の方も把握し、それをいかに上げていくかを努力していただきたい。

■委員長　「とさのさと」を例示されたと思われるが、農業所得をいかに上げていくか、農業全般に関わる話だと思う。それを、市としてもしっかり念頭においていただきたい。

新規就農者数が数値目標に達していない背景として、まず設備投資に１千万程度の壁がある。ではどうすればいいのか。そこへの補助が不足しているということになるか。

■委員　香南市は非常に手厚い補助や助成をしていただいている。

■委員長　それでも新規就農者数が目標に到達してないのは、それが原因ではないということか。

■委員　それもあるが、もう一点として、担い手センター等で技術を学んできて、そのやり方でやろうとすると施設整備が必要となる。そして一番は雇用の問題がでてくる。雇用ができないとなると、どうしても就農は難しい。これからの農業者雇用の問題が一番大事になる。

■委員長　施設園芸は人の手によって相当生産額が決まってくる。だからこそ生産効率をいかに上げていくかというところで「スマート農業」の話になっていく。

■委員　ロボット農業などは費用の面で考えると現実的ではない。モデル的なところでやっていただいて実際には出来ないと思う。

■委員長　「ネクスト次世代型施設園芸農業への進化」というプロジェクトの中でも、生産規模を上げていくときに必ず人の問題が出てくる。生産の現場もそうだが、集出荷場の問題も含め、それら全部の現場に繋がっていくというところを、どのようにするかを突き付けられていて、人の問題をどう改善するかというところは研究の一つの大きな出口として見据えている。今の話は重く受けて止めて、なんとしてでも解決できるように持っていきたい。

■委員　新規就農者が増えないのは、若い世代に農業が儲からないというイメージがあるのではないか。良いものを作っても売れなければ儲けることができないので、販売先についても、市・商と一緒になり、販売先もある程度の値段で売れば、収入も上がるし設備投資も回収できるので、助成金だけでなく販売先まで一貫したものができれば、就農人数も増えるのではないか。

■委員　ＪＡ高知県（販売本部）が県下の荷を集めて販売をしている。良いものを作っても高く売れないのではなく、量が沢山ありすぎるとどうしても単価は落ちる。今年に関しては天候の関係もあり、葉物関係は60％ぐらいの単価しか取れていないが、一過性のものもあり、一年間通せばそれほど目減りはない。単価を上げることは難しいが、ＪＡ高知の販売本部も全国各地に事務所を置いて全国的に販売しており、高知県の単価は他県と比べると高い。

特に、果菜類については単価が安定しているため作る人が増えている。また、ニラも人数は減っているが、面積は減っていない。知り合いの方が農業は儲からないと言われているようならば、一生懸命つくっておれば大丈夫ということを言ってあげて欲しい。

■委員長　供給過多になった時の値崩れを防ぐという意味においても、高品質で今よりも高い値段のつくものを市場に対して提供する工夫がいる。例えば、栄養成分を徹底的に分析し、ビタミン・ミネラルに関して、ある幅を担保しているとなると、生鮮農作物に対しても機能性表示食品の表示ができるようになる。品目によっては、売価が倍以上になってくる。それが市場で受け入れられている。

今後、高知県の施設園芸野菜あるいは農産物そのものが機能性表示になって、高品質な農産物にしていくということも検討されている。

一つの方策ですべてがというのは難しいので、戦略をたてながら全面的にやっていくということがあるのではないか。

今後このような議論を部会でも進めていただきたい。

■委員　海外のエージェントさんと交渉して、直接的に海外の旅行エージェントから送客をしていただくということを主に行っている。大型客船よりも、その送客のほうが年間を通して多く送客ができる。

定期的に中四国・関西に就航している海外の航空便を使って、四国の周遊のなかに、この地域（３市）が盛り込まれているのは非常に効果的と考えているが、来高の際に受け入れてくれる地域の観光に携わる方々の担い手不足について、どのように考えているか。この方々がいなくなれば観光自体が無くなってしまうという危機感を持っている。

地域内に観光コンテンツがたくさんあるので、協議会だけでなく、地域の方々に向けて「一緒に観光という分野で地域を守っていこう。」と取り組んでいかなければ、観光でこの地域を盛り上げていくことは成り立っていかない。

他にも、高知大学地域協働学部から週１回３名受け入れをしていて、地域のイベント時やツアーの入り込みの際にも、研修として地域の方々と一緒に活動させてもらっているが、学生達が本当に地域に残ってやってくれるのか。本来はこの地域に育っている子どもたちが地域に誇りを持って、地域の人と一緒に後々観光という分野で皆さんに来ていただこう、とか県外に出た時に観光大使になるくらいの気持ちで、誇りを持ってもらいたい。出身の高知県はカツオだけじゃない、私たちのところはニラがあるとか、そういったことを語れる人材を作っていかなければ、この観光というものはあっという間に終わってしまうのではないかと危機感を持ちながら行っているというところが現状である。

■委員長　とても大切なところの問題提起だと思う。

観光という分野でＤＭＯ協議会を含めて広域で活動が活発化し、組織的な体制もできてきていることを受け、担い手をどのように確保し継承していくか。現在、担い手の方とコンテンツが一体だから、担い手の方がいなくなったら、そのコンテンツも無くなって、観光からの集客もおぼつかなくなる。このあたりの問題点を、市はどのように受け止めているか。

■委員　観光コンテンツだけでなく、様々な部分の後継者というところで大きな課題と認識している。例えば、「山北みらい」を作って、ここで「人手不足や将来を担う人材を育成していく」という新たな事業もそれぞれ展開している。市を観光の視点で見るならば、全部が経営者の不足なり後継者不足問題があるのではないかと考えている。

■委員長　人の問題をどうしていくかというところで、先に担い手の確保等一定の時間が必要であるとすると、その一定の時間に先手を打てるかがポイントになっていく。観光では、これまでは観光クルーズ船を通じていかに誘客を図るかがポイントになっていたが、一定の交流人口が確保できるようになれば、コンテンツの充実といかに安定的に供給できるかとった話になってくるので、このステージが変わってきているような印象がある。

議論しているところのレベルが上がっており、レベルを克服するとまた新たな課題が見つかる。観光として、香南市では徐々にステージが変わってきていると受け止めている。

■委員　香南市の観光大使は。

■委員　先ほどの観光大使というのは、地域の子どもたちが将来観光大使になれるような教育をしていくことによって担い手が生まれるのではないかという意味で、香南市はミスマーメイドが観光大使を務めている。また、南国市や香美市にはそのような人はいない。

観光大使ではないが、地域の子どもたちに地域をＰＲしてもらおうという取り組みの一つで、物部川フェスタの中で地域の子ども以外も対象として、クイズ大会をはじめた。物部川エリアの問題が 50%、高知県の問題が 50%で作られていて、少しでも

地域を知るきっかけになればと思い始めたものです。第１回目の王者も決まっていて、今年も第２回目があるので、将来の担い手となる子どもたちが育ってくれれば良いと考え、育成についても少しずつ活動のなかに取り入れていこうと思っている。

■委員　三宝山はどうなっているか。

■委員　三宝山の山頂についてこの間いろいろな検討を行ってきた。最終的には香南市内の民間事業所さんが購入した。今後とも、県と一緒に協力していきたい。

この間、手を挙げていただいていた事業所さんについても、三宝山全体で考えるというところで、風車の跡地の利用について交渉を続けており、概ね話は進んでいる。あとは県のアクションプランの事業へ乗せていき、市としても協力していく方向で考えている。

■委員　アクトランド、動物公園、三宝山、龍河洞、アンパンマン、このラインを繋げていく取り組みをお願いする。

■委員長　懸案事項が新たな流れを見せている。

■委員　三宝山そのものは観光分野のなかで元々アクションプランに入っている。補助金についても現在、企業と協議をしている状態であり、三宝山についても、観光施設といった位置付けになっているため、龍河洞も含めて物部川流域の観光素材の一つとし、周遊プランとして育てていくよう、県もしっかりとケアしていく。

■委員長　ＤＭＯ協議会はどういった関わりがあるか。

■委員　具体的な話はまだ無いが、周遊に関しては現在も課題視している。特に２次交通の面について交通の便が悪く、野市から龍河洞に行きたいのに、グルっと回らなければいけないところが、10 年以上前からずっと課題視されてるが解決していない。「思い切って市の境を超えて周遊ができるバスを走らせて」といった意見はよく出ている。

■委員長　どこがイニシアティブをとって総合的にかつ具体的に描いていくかというところでは非常に重要な時期である。香南市はじめ物部川流域の３市がどうコミットしていくか、それでＤＭＯ協議会がどのように関わり、域内・域外の企業と、更には交通の関係も一体化して考えていかなければならないところである。

担い手や雇用の問題が出てくると思われるので、香南市をかなり中心として描いていく必要がある。委員にも県の物部川地域総括がいるので、トータルに協議する場が作られ、ここが実効性を持つように頑張っていただきたい。

■委員　今回の資料が非常にわかりやすい。苦戦しているところ、前進しているところが一目でわかる。

■委員　今後は非常に地域が大切になる。うちにも町内会があるが入ってない人がいるが、自主防災組織には入っているのか。また、町内会に入ってもらうようにするのは、行政が主導なのか、若しくはその地域の人が主体的にやっているのか。

■委員長　自治会・協議会・自主防災組織の結成率や、その中にどれぐらいの人が参画をしているのかが今後のポイントであるという意見をいただいた。

■事務局　町内会に入らなくても困らないことが大きな理由の１つである。ただ、なぜ市としてまちづくりを進めているかと言うと、いざという時に顔を知ってないと助け合いができない。防災面で、自助・共助・公助と言った３つの助け合いがあるが、まず行政が動く前に地域が動いていただがかないとという面でも、加入を促進させていただいている。入らない方については、地域の方から相談をいただいたら、市の職員も町内会長さんと一緒に勧誘に行っている。町内会の勧誘に関しては行政と町内会が一緒にやっていくものだと考えている。

自主防災組織もある、町内会もある、地域が一つになっているということが今後大事なところなので、行政も支援しながら進めていきたい。

■委員長　現在、自主的なコミュニティの形成や、そこに参画する意義などを、どのようにアピールしていけば良いのかということが、いろいろなところで議論されている。

「人と人の繋がりが寿命に影響する」ということを実証したデータがあり、急性心筋梗塞になり退院後の半年間でどのような環境の変化が起こったか、統計的に調べたデータがある。家族も友人もほとんどいない人の場合 70%の方が亡くなっているが、逆にコミュニティリッチで周りに心を許せる人がたくさんいる人の場合は、わずか 27%の死亡率だった。これが統計的にも有意であった。コミュニティの持つ価値が、その人の健康状態や人生そのものに実質的に影響するということが注目を集めている。

香南市でコミュニティリッチを数値化し、値が高い方はこんな人生を楽しめるんですと言えるようにすると、自主防に入る・町内会に入るといった自発的な取り組みがコミュニティリッチ度を上げるというところで更に繋がりが明確になり、モチベーションも明確に高まるといったことをやると非常に良いのではないか。

■委員　新しく市に転入して来られた方に対して、町内会や協議会の重要性（案内）について説明があるのか。

■事務局　転入して来られた方には「まちづくりのダイジェスト」といったコミュニティの大切さを記したチラシを１枚お配りしている。次に、同意書をいただき、同意があった方には町内会長にも情報を伝え、勧誘してもらうようお願いしている。

■委員長　「空き家バンクの中で、空き家を明確化して、それにより移住者の方々をしっかり受け止めていくコミュニティにしていこう」という話があり、相当成果が出ている。

■事務局　移住を進めていくうえで何が大事なのかを考えた時に、「地域が楽しくないと移住者が楽しくない」ということで、はじめは地域に人を呼び込むだけだったが、まずは「移住について地域の住民に知ってもらうことから始めないといけない。空き家バンクの取り組みについて、住民周知に努めること」を徹底して行い、次の段階が移住者だという形で努めてきた。平成 28 年度に移住相談窓口を設けて、その時に移住相談員になってくれたのが近藤委員であり、今は地域の住民となって広げてくれている。このような形で地域を大事にしたうえの移住で周知を行ってきた。住民の人から「香南

市は空き家バンクやっているよ」と口コミで広がってきているのがありがたい成果である。

■委員長　空き家バンクを登録してもどこに空き家があるか分からない状態から始まった。それを分かるようにして、その後、空き家が埋まるというのは、移住者の方が住まれるということをみんなが受け止めて、理解をして仲間を受け入れる。非常にストーリー性が出来てきており、空き家があり、移住者が来られるといった一つの点と点が繋がってきていると感じる。

■委員　表を見ていた時に、空き家バンクの数も増えている、移住者の数も目標数値より大幅に増えているのは、とても良いことだと感じる。

私が移住してきたきっかけが、お遍路をしていて野市を歩いていたところ、旦那さんと出会い、移住に繋がった。同じような話しが周りにも２件ある。

新しいことで市外から人を呼び込むというのもとても良いことだが、お遍路の文化があり、香南市には大日寺があるので、お遍路道の草刈りをみんなでしてみるなど、もっとお遍路文化を地域で大切にしたら良い。

加えて、市民のほとんどが正規のお遍路ルートを知らないのではないか。１度香南市内の遍路道を歩いたが、「こんな道があったんだ。」ということや、たくさん新しい発見があった。また、年に３回ぐらい間違って遍路ルートを行ってしまい、自分たちが連れ戻しにいくこともあった。それだけお遍路道沿いに分かりやすく遍路道の表示がされてない。

愛媛県の愛南町はお遍路文化に対して住民が動いていて、遍路マークもわかりやすくなっている。案山子が立っていて、「お遍路さんはこちら」と書かれたものがあったりして、香南市に移住しなかったら愛南町に移住したのではないかと思うほど、すごくお遍路さんへの温かみがある良いところだった。香南市に来た時にそれが無かったので、もっとお遍路さんに住民の方の理解があったら、それが観光にも繋がり、ゆくゆくは移住にも繋がる、またこういった取り組みについては今からでもできることではないか。

現在でも、ある程度の人数、若い方もお遍路に来る方が居るのでそんな方の訴えを聞いて、観光・移住に繋げていけたら良いのではないか。

■委員長　本当に大事なことで、交流人口が関係人口になって定住人口に変わっていく。その入り口のところで、お遍路文化というのは、四国・高知あるいは香南市で極めて重要なメニューの一つだと思う。お遍路さんに対するおもてなしを更に徹底して高めることを通じて、思いやりの町をアピールするのも非常に重要なポイントかもしれない。

また、お遍路さんの数が日本人は減っているという話が出たが、一方で外国の方はとても増えている。外国人インバウンドの方々をどのようにおもてなしするかという一つの根拠として非常に重要なものと位置付けると、全く違った展開ができる。また、組織としても、高知県商工会議所の婦人部など、遍路道に対して石のマイルスト

ーンを作るなどいろいろ行っているところがあるが、そのようなところと連携を組んでいけば、すぐにやれることがあるのではないかと思う。

■委員　香南市に移住してくれる方は全てとは言わないが、お遍路さんや観光も含めて香南市を体験された方が来てくれているのではないか。

■委員　愛南町の役所は、役場の前にプレハブ小屋が建っていて、そこがお遍路さんの休憩所になっているお茶が用意されていたり、飴が置いてあったりと、役場が代表になってお遍路さんのおもてなしをしている。中のトイレも使えるようになっており、長太郎貝の貝殻を使った「お遍路さん頑張って」と書かれた小学生の作品も置かれており、頑張るぞという気持ちになった。

■委員　2060 年の人口というのは、今生まれている子どもが 40 才になる頃で、今の子育て世代の先輩の子どもたちを見てみると、大体県外に出て帰ってこない方が多いのは、それだけ地元愛が少ないからと考える。ＮＨＫの番組で鹿児島の離島の長が山村留学をしていて、都会から来た子どもたちが学んでいる。また、地元の子も、農業・林業・漁業などいろいろなことを学んで、一度県外に出るが帰ってくるといた内容であった。長期的な取り組みで地元愛を育てる。自分のもっと下の世代の子どもをいかに地元に残らせて、地元愛があるかというところを、次の５か年計画、およびその次の長期スパンに渡って検討していただきたい。

若しくは、公立のインターナショナルスクールを開校して欲しい。

普段漁業している子に農業を体験してもらうなど、さまざまなことを勉強してもらい、経験を通して地元愛のある子どもたちを育てて欲しい。

■委員長　公立の学校を中心としていかに地元愛を醸成していくかを、やり方として、県立・あるいは市町村立の学校をコミュニティスクールという言い方をするが、地域の方々が一定のマネジメント（意見が出せる）ができる、公立ではあるけれども地域の民意によって運営できる組織にしていくという話がある。

これをもっと活発にしていかなければならないという話が国の方でも非常によく言われている。そのようなことをどのように描いていけるか、そのことが市民住民の方々のシビックプライドの意識を高めていって、そこに仲間になりたいと思った方が自然と移住してくるという世界になれば、地域間の競争にも打ち勝っていける、ということで当然世代を超えて、子どもが県外に出て行ってしまったという話になりにくい。またこういったことを少しでも変えていくことになるかもしれない。

■委員　香南市は子育て世帯に対して他の市より優しく支援が充実している。しかし、人生をトータルで考えると、高齢者の方の免許証返納者に対する支援について、車が無いと生活ができない方が周りにおり、市バスなどは決まった場所にしか行かないから、生活していくには車がないと無理である。返納者の方に対しては、例えばシニアバスのようなもので、「予約ができるシステムがあり、行きたいところにいけるようなもの」が出来れば良い。

■委員長　子育て世帯には優しいと満足していただいているが、オンディマンドバスのような、免許を返納した方にも優しい公共交通のあり方についてはどうか。

■委員　高齢者の移動手段の確保について、香南市によって非常に大きな課題と認識している。市営バスだけではもう解決しない、という認識も持っている。

現在、高齢者介護課を中心にさまざまなことをやっていこうとしている。今も、社会福祉協議会の買い物バスなどいくつかの仕組みはあるが、ＰＲが足りないのか、それだけで十分なアイテムになっていないのか、といった議論もある。頂いたご意見のように、予約をして door to door で行ける公共交通について今後どう考えていくか、これについては、オールフリーなのか、一定、障害や年齢などの制約を設けていくかなど、いろいろなやり方があると思う。

逆に、地域の方々にそういった仕組みを作ってもらい、それを市のほうが一緒に支援をしていくスタイルが良いかなど、非常にさまざまなことを検討しているところである。市としてもいろいろなアイディアのなかでやっていきたい。ただ、一つ考えているのは、市だけでの公共交通サービスというだけでは、高齢者の移動手段は厳しい。地域の方々と工夫していき、方法を決めてかなければならないと考えている。

■委員長　しっかりとどれぐらいのニーズがあって、どのようなものであればこれを利用したいと思うか、その辺の基礎的な調査は必要だろう。そういった面に基づいて検討していただきたい。

■委員　今回で第３回の話し合いになっているが、第１回目では漁業のことを話しさせていただいて、２回目は商店街での空き家の再利用のことについて話しをさせていただた。それに対して委員長の発言などもあって、それが３回目に繋がっていくのかとなると、繋がっている。繋がっており、みんなの意見が大体まとまってきているけど、広がるだけで、あまり縮小した話が出来ていないかなと感じる。

年齢の近い委員の意見は、話しをしていて共感ができるし、やったら良いと思う意見がある。他の委員についても、自分が分からないこともそれぞれ専門なので、それについては答えてくれていると思う。

自分は赤岡町の経済の仕事をしており、住んでいるところは香我美町だが、香我美町にも先やり的な方がおり、赤岡町では自分がそのポジションになれたら良いと思いながら仕事をしている。しかし、誰に相談してよいのか分からない。町の中でも部落によって全然しきたりも違うし、考える文化も違う。その中でまとめていくことを、この会で出来たらと思う。また、ここで話されたことを改めて、市役所に話に行くではなく、野市に新しくできた「にこなん」のような、集約された相談場所ができると良いなと思っている。

■委員長　委員の構成も当初から変わっているので、雰囲気もずいぶん変わった。若い方の意見を多くとの声もあり、若い方も多くや女性も増え、徐々に議論している内容も変わ

ってきている。もちろん、どこを重点化していかなければいけないか、というところは継続していかなければいけない。

一方で、移住して来られた方の視点や地元愛、子どもたちの教育をどのようにしていかないといけないのか、非常に多岐にわたると同時に、これまで議論の遡上に出てなかったものがどんどん投げ込まれているように感じる。これまでは５年間の計画をまず作り、「毎年それをＰＤＣＡで回していきます」だったのが、その意見を受けて、微調整を行っていくのがここの場であったと感じている。この場でいろいろな意見がでて、それをどう受け止めるかという、抜本的な見直しを今年度から来年度にかけてできるタイミングにある。今日の問題提起に関しては、香南市として具体的にそれをどう落としていくか、具体的にどういう施策で具体化していくのか、それを支える計画としてはどうあるべきか、次のアクションをどうとれば良いかご検討いただきたい。毎回、会の中で意見をいただき、反映されている部分はあると思っている。皆さんの意見を聞きっぱなしにしてることでは無いと思うが、是非もっと大きなスコープで考えていけるよう、今のご提案は反映してもらいたい。次回につながるように検討をお願いする。

６．その他

（１）年間スケジュール

（２）第 2 期総合戦略の策定に向けて（情報提供）

（３）高知大学出前公開講座について（案内）

７．閉会